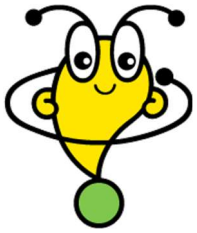
第 203 号



館長だより

山形県産業科学館

令和７年４月３日(木)

発行 館長　加 藤 智 一

イチョウの落ち葉

前に勤めていた高等学校には、銀杏の木が多数ありまして、秋になると強烈な匂いと共に、枝いっぱいに実を付けるものでした。それだけならよろしいのですが、時期が来れば自然落下は物理の法則。元々駐車場のスペースがあまり無い敷地でしたので、銀杏の木の下に車を停めないように、チョット早めに登校するのがその時期の常でありました。それでも黄色い落ち葉が一面に敷きつめられた景色は、なかなかなもので、楽しみでもありました。そう言えば、銀杏の落ち葉は、清掃作業で集めても、無条件で燃えるゴミ扱いでしたが、なぜ腐葉土作りに使用しなかったのでしょうか。それには訳があったのです。恐らく、イチョウには、周囲の植物の生育を抑える「アレロパシー」と呼ばれる効果があるためではなかろうか。しかし、考え方によっては、その効果を逆手にとって雑草対策に使えるのでは。ということで、JR 西日本では、銀杏の落ち葉を線路脇に敷きつめることで、光合成を遮る効果と合わせ、雑草の生育を抑え、除草作業の負担軽減を図るという作戦に出たそうです（銀杏の葉は滑ると思うのだけれど？問題なかったのかな？）。きっかけは、ＪＲ西日本の姫路保線区加古川保線管理室、長浜哲朗室長が、2023 年夏、長野県の親類宅に遊びに行った際、親戚の高齢女性から「イチョウを植えたら、作物が育たなくなる」と聞いたことによるのだとか。線路脇の雑草は、放置すれば信号を覆うなどして電車の安全運行を妨げる恐れがあり、定期的な除草が必要です。同室では年３回程度、約 3,000 万円をかけて除草しており、長浜室長はイチョウを雑草対策に活用できないかと思い立ったのだそうです。その効果の程はというと、まず線路脇の雑草を刈り取り、〈１〉除草剤を散布する〈２〉除草剤を散布し、イチョウを敷き詰める〈３〉除草剤は使わず、イチョウを敷き詰める、で検証した結果、〈１〉では雑草が生い茂りましたが、〈２〉では育たず、〈３〉は〈２〉に比べると一部の草は生えましたが、刈り取りが不要な程度だったそうです。厚く落ち葉を敷き詰めた方が雑草の光合成を遮ることができ、成長を抑える効果が大きく、長期間の効果が確認できたため、除草作業の負担が減り、費用削減も期待できることがわかりました。この取り組みは、今後広がるかもしれませんね。

新年度が始まって・・・・・

令和 7 年度がスタートしました。早速、社会の変化、ニーズに対応して、行政においても、企業においても、新しい取り組みが次々と実行されています。

例えば、ドイツの自動車部品メーカー大手「ボッシュ」の日本法人の入社式では、「ミニ四駆」大会が行われました。参加した新入社員は約 70 名。それぞれチームに分かれてマシンを製作。試走を重ね、調整を繰り返し、スピードとデザインを競いました。この取り組みの目的は、役員と新人社員が一緒に取り組むことで結束を強め、入社後の３年離職率を上げないことだとか。

行政においても、新しい取り組みが始まりました。東京都と川崎市では、新築の建物に太陽光パネル設置を義務付ける制度（狭小住宅は例外）を始めました。小池知事は「東京にメガソーラーを設置できる場所がない。エネルギーの大消費地として屋根というポテンシャルを活かし、自立したエネルギーを創出することが重要だ。」と述べています。